



地域医療センター  
地域医療連携通信

# 5

MAY.2007  
Vol.19

● 外来診療時間 ●

午前8時30分～正午  
午後1時～午後4時30分  
(休診日)  
土・日・祝日



電子カルテシステムに取り組む新任看護師研修

## 目次：CONTENTS

- 2 新任のご挨拶 山崎隆章企業長  
田村昌己事務局長

---

- 3 高知医療センター平成18年度のデータ統計

---

- 4 第1回高知医療センター職員による学会出張報告

---

- 5 日本看護研究学会中国・四国地方第20回学術集会  
地域医療連携室：転院支援業務担当者のご紹介

---

- 6 医療技術局よりおしらせ

---

- 7 電話での外来仮予約について

---

- 8 地域医療連携病院のご紹介・おしらせ

患者さんが主人公の  
病院をめざして

高知医療センターの基本理念

1. 患者さんが主人公の病院にします
2. 高度な医療を普段着感覚で提供します
3. 自治体病院としての使命を果たします

平成19年5月1日発行  
にじ 5月号(第19号)  
責任者：堀見 忠司  
編集人：地域医療連携広報委員  
特別編集委員  
発行元：高知医療センター  
地域医療連携本部  
印刷：共和印刷株式会社

高知医療センター  
〒781-8555 高知県高知市池2125-1  
TEL:088(837)3000(代)

## 新任のご挨拶

山崎隆章 企業長



穀雨もすぎ、もうすぐ八十八夜。日差しは少しずつ強くなり、まわりの山々は若葉に萌え、笑っています。

高知医療センターの企業長に就任して1ヶ月、病院の新しい専門用語にとまどい、大きな建物の中では方角オンチよろしく、うろうろとしている毎日です。そんななかで、驚きの感がいくつかありました。そのひとつにNICU(新生児集中治療室)があります。保育器の中に小さな赤子、500グラムに満たない新生児が元気に育つということには驚きでしたが、分娩件数が減少しているなかで、ハイリスク分娩や低出生体重児は増加し、当センターのNICU9床は満床の状態です。

県下各地から24時間体制で妊婦さんや新生児の救急搬送を受け入れしていることから集中していると思われませんが、それも総合周産期母子医療センターの機能を有しているからこそです。

もうひとつは、ヘリコプター搬送による重症患者の受け入れの多さです。昨年度1年間に220件余の搬送があり、屋上ヘリポートには、ほぼ3日に2回はヘリが離着陸を繰り返しています。また、高度な治療を必要とする患者さんの受け入れも多く、救命救急センターはフルに活動しています。

こうした高知医療センターの機能は、地域の医療機関の皆さまとの連携があってこそ活かされるものであり、これからも今まで以上に連携を強めていくことが大事だと考えます。私も、開院3年目を迎えた高知医療センターの基本理念や目標をしっかりとわきまえ、県民市民の皆さまの期待に応えられる病院づくりに全力で取り組んでまいりますので、どうかよろしくご挨拶申し上げます。

山崎隆章

## 新任のご挨拶

田村昌己 事務局長



この度の4月の人事異動によりまして、高知市から派遣され着任いたしました。

私は以前、高知市民病院に3年ほど勤務いたしておりました。平成10年度まで、統合新病院の基本構想の策定や整備に向けての県・市協働での組織づくりなど、一部事務組合設立までの仕事を吉岡前企業長のもとでさせていただきました。その当時の高知県の医療の状況は、患者さんの一部が県外の医療機関に流出するなど、必ずしも十分とは言いがたく、また、国の医療施策の動向からも、県民、市民は高度医療機能の充実などが望まれておりました。

基本構想の段階では、新病院の期待される役割として、①高度医療機能、②機能分担と連携の先導的役割、③へき地を含む地域医療の支援機能、④医療従事者の教育研修機能、⑤医療環境の変化に対応した先導的な役割を発揮できる病院機能などが検討されておりました。その後、新病院高知医療センターとして、平成17年3月に整備され、開院3年目となっておりますが、医療面においては、県内はもとより県外の医療関係者の間でも極めて高い評価をいただいています。

また、本年度からは地域の医療機関とともに、地域医療を担う基幹的な病院として「地域医療支援病院」の承認・指定を受け、運営してまいります。今後とも、県・市統合病院整備の所期の目的である地域の医療機関との連携を密にした高機能実践型病院としての役割を果たしてまいらなければならないと考えておりますので、皆さま方のご指導をよろしくお願い申し上げます。

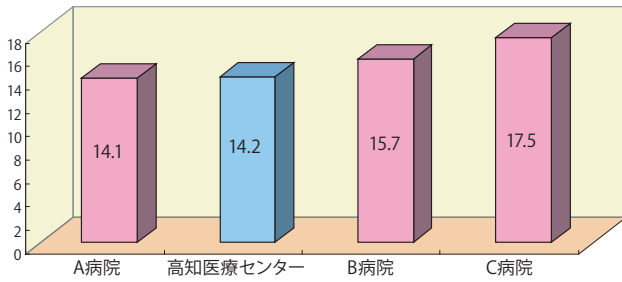
田村昌己

# 高知医療センター平成18年度のデータ統計

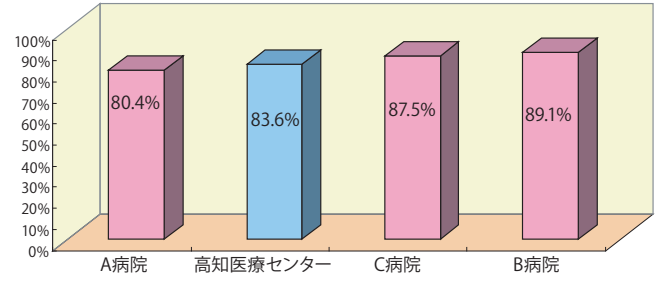
## 四国内の四大公立病院間の比較データ

A 病院 H18.12.1 日現在データ B 病院 H18.12.1 日現在データ  
C 病院 H18.12.1 日現在データ 高知医療センター H19.3.31 日現在データ

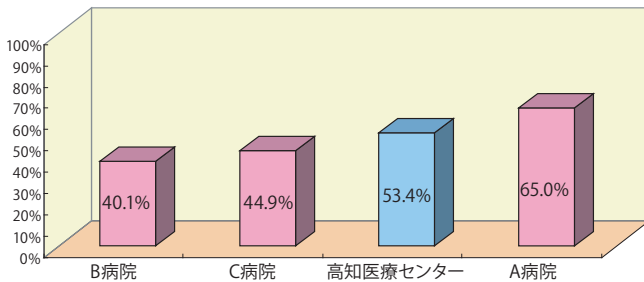
### ●平均在院日数



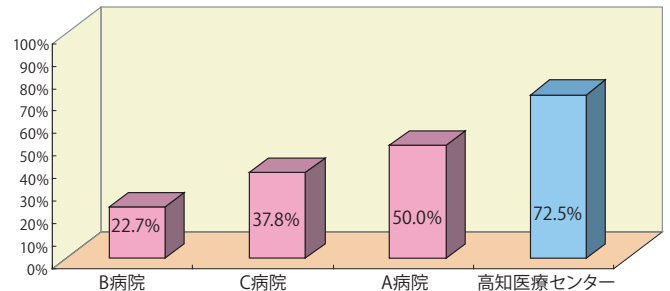
### ●病床稼働率



### ●紹介率

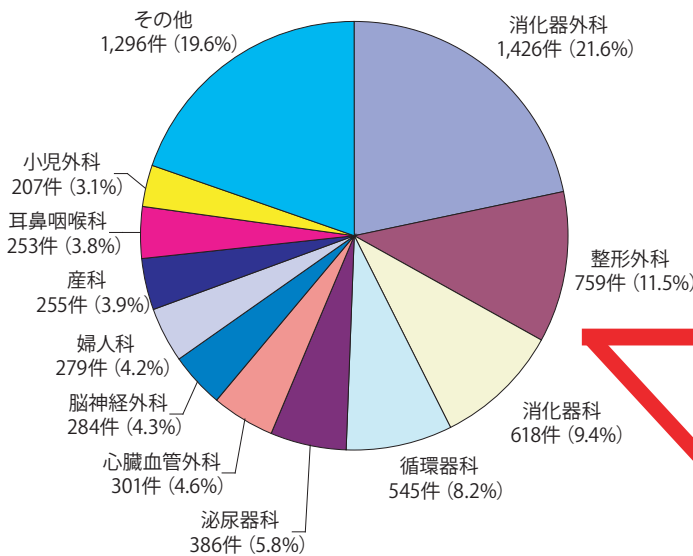


### ●逆紹介率

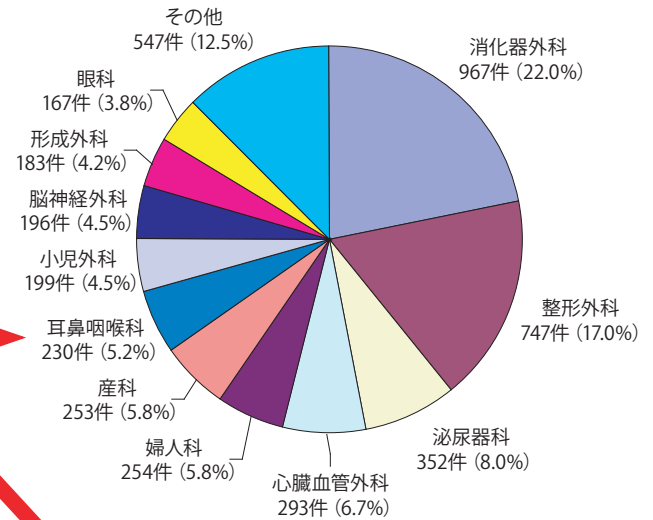


## 高知医療センター平成18年度手術件数統計

### ●平成18年度診療科別手術全体件数 N=6,609



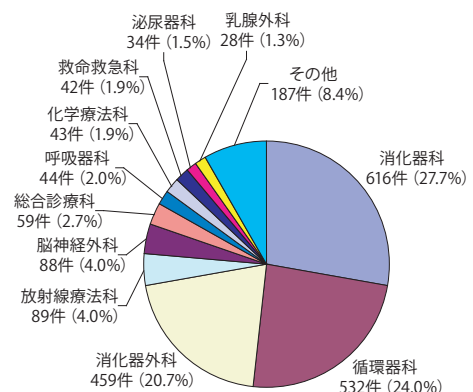
### ●手術室を使用した手術 N=4,388



高知医療センターの平成18年度手術全体件数は6,609件であった(図上)。その他に入る診療科は形成外科、眼科、呼吸器外科、放射線療法科、移植外科、乳腺外科、総合診療科、歯科口腔外科、腎臓科、救命救急科、一般外科、呼吸器科、化学療法科、ペインクリニック科、血液科、小児科、生殖医療科、代謝・内分泌科、皮膚科、神経内科、麻酔科、集中治療科、新生児科となっている。

手術室を使用した手術件数は4,388件(図右上)で全体の2/3を占めており、それ以外のカテーテルや内視鏡を使用した手術件数(図右)は、2,221件で全体の1/3であった。

### ●手術室以外での手術 N=2,221



# 第1回：医療センター職員による学会出張報告

高知医療センターの医師はいろいろな学会に参加しています。そのなかから、学会レポートをご紹介します。

## 日本医学会総会 日本内科学会総会など

総合診療科・副院長 深田順一



4月3日～5日は日本内科学会総会、6日～8日は日本医学会総会、そしてその中日の7日は初期臨床研修セミナーでの医学生の勧誘ということで、6日間にわたって大阪市に出張した。年度初めということで、この週から医療センターで活動を始める方々を気にしながらの出張でもあった。

内科学会総会は3日午後の定例評議員会から出席したが、ここで目を引いたのはまず、執行部より初めて「内科専門医」の医師像と、内科学会が考える「適切な専門医数」が公表されたことであった。会の説明では、現在、多くの学会がそれぞれに定めている「専門医」をたばねる組織として日本専門医認定機構があるが、内科学会専門医は外科学会専門医とともにこの認定機構からは“認定保留”扱いとなっており、認められていない。その理由は他の専門医に比べて「専門医像」と「学会の考える適正専門医数」が明らかにされていないことによるとのことと、今回、これに対する回答をまとめた、ということであった。この中で「専門医像」については、「一般・総合内科医」という性格を基本に、そのおかれている場によって、全人的・機能的視野から臨床指導、教育、そして臨床教育をそれぞれプランニングし、リードしてゆける能力を持った医師、と位置づけ、その必要数を約3万人とした。これは通常の病院であれば内科診療科を構成する3～4人に一人、地域医師会では内科を標榜する6～8人に一人というあたりを想定しての数字のようである。

2点目は内科医の持つべき救急対応能力についてで、認定医や専門医の認定に際し、これをどう位置付けるか、執行部の対応が緩慢かつ曖昧だ、との指摘が東京女子医大の笠貫教授からなされ、かなりの議論が交わされたが、執行部としては内科学会の抱える他の重要課題への対処とあわせ、今回新設する「総務委員会」で集中的に方向付けをしていくということであった。

翌日からの内科学会総会の方はいつものようにメイン会場に終日陣取って、次々となされる教育講演を拝聴した。記憶に残ったものでは東大内科の藤田敏郎教授が最近の研究で、インスリン抵抗性については腎臓は筋肉や肝臓とは異なる証拠を得た、と、はじめて「インスリン抵抗性の臓器差」という点にスポットライトを当てた研究成果を報告され、小生にとっては積年の疑問が解けた思いがした。というのは、これまで何人かの糖尿病の大家と言われる先生方から「インスリン抵抗性」に関する講演を聞く度に「インスリン抵抗性による害」という言い方

は、この抵抗性が全身で共通であれば成り立たない概念であるので、必ず臓器の差、という問題があるはずだ」と質問を投げてきたにも拘らず、どなたからもまともな答えを得られなかった、という経緯があったからである。今回は溜飲の下がる思いであった。

(写真1)

6日からは第27回日本医学会総会に出席した(写真1)。こちらは開会式で司会の式典委員長が、壇上の役員紹介で人を飛ばす



わ、呼び間違えたと、立て続けに“ちゃんぽ”を重ねたのがご愛嬌であったが、翌日からの講演群はそれぞれに内容の厚いもので、さすが、という感じであった。この日、小生は「免疫システムの新しい理解について」と「感染症を巡る現状について」のシンポジウムに出席し、前者では制御性T細胞について(京大・坂口教授)、後者ではトリインフルエンザについて(東大・河岡教授)の講演が印象的であった。

(写真2)

7日は1日、大阪ドームで医学生向けに高知医療センターの初期臨床研修について説明する会に出席したが、まさに売り手市場の様相を呈しており、手ごたえあり、というところまでは至らなかった



(写真2)。また8日に戻った医学会最終日の特別シンポジウムは「医学・医療制度への提言」ということであったが、演者がそれぞれの視点から問題点を述べたという羅列の印象が拭えず、もうひとつ、というところであった。



# 日本看護研究学会中国・四国地方第20回学術集会

## テーマ「看護実践における地域医療連携」

文責：実行委員長 梶本市子(高知医療センター看護局長)

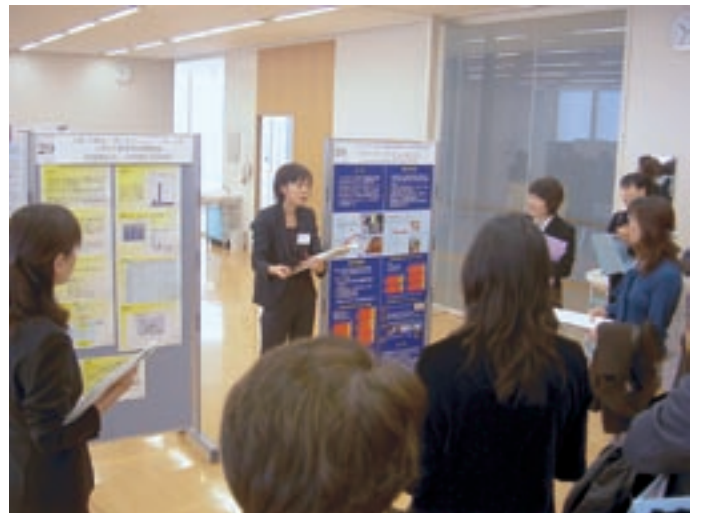


日本看護研究学会中国・四国地方会第20回学術集会を「看護実践における地域医療連携」をメインテーマにして、平成19年3月4日(日)に、高知医療センターで開催しました。日本看護研究学会は日本の看護に関する学会の中では、歴史も古く学会員数も約5,000人の大きな学術学会ですが、高知での地方会開催は今回が初めてでした。この地方会学術集会は、看護の実践と教育と研究のそれぞれに関心を持つものが集って、互いに学び合い研鑽し合う場となることをめざしています。当日はお天気にも恵まれ、中国・四国の各地から予想をはるかに超える約260人が参加されました。

最近のめまぐるしい医療制度の変化に伴って、患者さんやご家族が安心して療養生活を送ることができるために、地域と医療機関が一体となって取り組むケアシステムの構築が急務になっています。必要なケアがとぎれることなく継続して提供されるシステムが必要であることは、それぞれの現場で話題となり取り組むべき課題として明確になっている状況だと思われます。そしてその中で看護職にはどのような役割が期待され、どのようにそれを果たすことができるのか。日々模索をしている看護職者が一緒に考え、これからの活動にヒントや勇気を得ることができるように、シンポジウムのテーマを「ケアの継続と質の向上をめざした地域医療連携」としました。地域医療連携活動を看護職として実際に行っているまさに旬のシンポジストとして、急性期病院の立場からの発言を鳥取大学病院の医療福祉支援センターの吉村繁子さん、地域看護の立場からの発言を松山市にあるベテル在宅療養支援センターの吉田美由紀さん、看護教育の立場

からの発言を高知女子大学看護学部の森下安子さんにお願いしました。座長は愛媛県立医療技術大学看護学部の野村美千江さんでした。シンポジスト達のパワフルな活動内容の報告とそれぞれの提言などから、大いに刺激を受けて「今の関心事を各シンポジストが鋭い切り口で発言され、目からうろこの数々でした」などの感想がきかれました。

共通して語られ強調されたことなど、要点をまとめてみました。看護師は患者さんの生活と病気をつなぎトータルケアマネジメントできる存在として、地域医療連携に関わりその力を発揮することができる。まず患者さんの退院後の生活についてどのような生活をしたいのか、看護師が患者さんにご家族の意向を確認することからスタートする。患者さんやご家族は在宅への移行に関して多くの不安を持っているものであり、具体的な情報提供を誰がどこでするか、分かるようになっていることが重要であり、24時間体制での相談窓口は効果的に機能する。患者さんの「重症だから家に帰りたい」にどう応えるのか。方針の決定、ケアチームの構築、初回訪問の実施、退院後のモニタリングなど、積極的に取り組むことで可能になる。「家に帰りたいのに帰れない」は病院関係者の認識に問題がある場合が多く、可能な方法を探る努力が必要である、などでした。特に実際の事例をもとにした話の展開からは、一人ひとりの患者さんにご家族にきちんと向かい合い、ニーズを丁寧に確認し、柔軟に対応を



パネルディスカッションの様子

探っていくその熱意と、ケアシステムを構築していく行動力、組織力の発揮などは、一つのモデルとして参考になるものでした。また、病院から在宅・患者さんとケア提供者などの、関係者をつなぎ、看護ケアをつなぐ専門看護師として「在宅リエゾン看護師」の育成が計画されていることが紹介されました。

また、学術集会のプログラムとしては、一般演題(口演、示説)のほか、高知医療センターでの開催という特徴を活かして、「電子カルテシステムを活用した看護実践」と「WOC看護認定看護師によるオストミーケア」の2つの実演交流会を行い、それぞれに弘田由利美さんと片岡薫さんに活躍していただき大変好評でした。また、地方会学術委員会主催の特別セミナー「看護研究のそこが知りたい！疑問から研究課題へ」は、看護研究への関心度を反映して150人近い参加者が集い、研究課題を焦点化していく過程を一緒にたどり好評を得ました。学会終了後には病院見学を希望された60人をご案内し、長かった一日が終わりました。

学術集会のプログラムが良い、学会運営が親切で感じがよい、施設が立派で感心した、などが大方の評価で、準備を一年間担当してきた実行委員、準備委員、そして当日の運営を担当して下さった45名の協力員のパワーに、感謝の気持ちでいっぱいです。参加者に恵まれ、スタッフに恵まれ、お天気にも恵まれ、高知医療センターの施設にも恵まれて、開催して本当に良かったです。関係者の皆さまに心からお礼を申し上げます。



## 地域医療連携室：転院支援業務担当者(MSW)のご紹介

よろしくお願ひいたします！



左から三浦麻衣(MSW)、大沢たか子看護部長、藤井しのぶ(MSW)

4月から地域医療連携室のMSWが交代になりました。昨年の10月より三浦(MSW)、千頭(MSW)、大沢(看護部長)の3人で転院調整の業務を行っていましたが、今年4月より藤井(MSW)が地域医療連携室に加わり、千頭はまごころ窓口に移動いたしました。

今後は、三浦、藤井、大沢で地域連携の業務に携わっていきます。今後ともよろしくお願ひいたします。

(大沢たか子)

## 高知医療センター医療技術局よいーおしらせ

### CDでの画像出力が可能となりました！

現在、高知医療センターの画像診断部門で実施した放射線検査(一般撮影・X-TV・CT・MRI・核医学検査・血管撮影)の画像は、フィルム出力のみの対応を行ってきましたが、平成19年4月17日よりCDでの画像出力も可能となりました。

ただし、**フィルム・CDの同時出力には対応できません**ので、画像出力が必要な場合は、ご希望の出力方法を予約の際にご連絡ください。なお、CD出力する画像はDICOM-3準拠の画像出力(DICOM Viewer Soft付属)を行いますが、**Macintoshには対応できません**のでご注意ください。



# 患者さんのご紹介は電話での仮予約で簡単に…。

高知医療センターでは、できるだけかかりつけの先生方の負担を少なくするために、簡単に診療のご予約をしていただけるよう、以下の方法で承っております。

## ●患者さんの診療予約の手順

地域医療連携室にお電話をいただければ、診療予約の空いている日時をお答えし、仮予約をいたします。診療申込書は、後でFAXしていただくようお願いいたします。

### Step1. かかりつけの先生方



かかりつけ医:診療室で…

電話

予約枠の仮押さえ

- ①希望受診科(医師)
  - ②患者さんの氏名
  - ③受診希望日
- 等をお聞きします



地域医療連携室



私たちが対応しています!(澤田・平山)

その後…

### Step2. 紹介元医療機関の方



事務職員等

診療申込書と保険証のコピーをFAX

FAX

診療予約票をFAX



診療予約票  
診療情報提供書  
レントゲンフィルム等  
を患者さんへ



医療センターへ  
紹介患者さん来院

## 診療予約のはてな? ④救急患者さんの診療予約は…?

救急診察を要する救急患者さんが発生した場合は、救急患者搬送ホットライン(医師直通)にご連絡ください。その後、診療申込書と診療情報提供書を救命救急センター外来(FAX:088-837-6798)までFAXしてください。また、循環器専用ホットライン、母体搬送専用ホットライン、新生児搬送専用ホットラインも開設しております。ただし、**ホットライン使用は医師間のみ**となっており、**医師以外の方にはご利用していただけません**のでご了承ください。ホットライン番号につきましては、医師会を通じて各医療機関さま宛に通知させていただいております。診療情報提供書の正本は地域医療連携室までご郵送ください。



## 医療法人地塩会 南国中央病院



〒783-0011 高知県南国市後免町3丁目1-27  
TEL:088(864)0001 FAX:088(864)0332  
URL:<http://www.chisio-group.or.jp>

(診療科)  
内科、胃腸科、呼吸器科、循環器科、外科、整形外科  
消化器科、脳神経外科、リハビリテーション科

(関連施設)(建設中の施設を含む)  
診療所(2ヶ所)19床、老人保健施設(2ヶ所)160床、特別養護老人ホーム(1ヶ所)60床、養護老人ホーム(1ヶ所)100床、ケアハウス(4ヶ所)300床、グループホーム(10ヶ所)180床、有料老人ホーム(3ヶ所)172床



左前方から友美里さん、杉本美紀さん、森田恵子さん、左後方から中村英実さん、松岡綾さん、福岡あゆみさん、井田雄さん

医療法人地塩会南国中央病院(99床)は、昭和62年に南国市に開院し、救急病院としての役割も担い、また地域のかかりつけの病院としての機能も果たしており、平成17年に病院機能評価の認定を取得しています。現在の病床数は、一般病床45床(うち急性期病床10床)、回復期リハ病床54床の合計99床となっています。今年4月から、脳神経外科と整形外科の医師が常勤となり、スタッフの充実がはかれました。今回は、医療相談室の松岡綾さん、中村英実さん、友美里さん、理学療養士の森田恵子さん、井田雄さん、看護師の杉本美紀さん、福岡あゆみさんにお話を伺いました。

Q: スタッフの構成と業務内容についてお聞かせいただけますか?

A: 開院当時から医療相談室としてはありましたが、その当時はMSW1名で業務を行っていました。昨年の7月からMSW3名になりました。医療相談室では公費関係のご相談を受けたり、在宅復帰に向けて家屋調査をしたり、入退院の調整を行っています。転院のご相談は月平均20件ほどあります。転院のご相談を受けると、随時、担当者で集まりカンファレンスを行っています。カンファレンスのメンバーは医師、病棟の看護師(ベッドコントロール)、リハビリストアッフです。

Q: 回復期リハ病床の受入れはどのような患者さんが可能ですか?

A: 主に、脳神経外科と整形外科と内科(肺炎後の廃用)です。在宅に向けて私たちも努力していますが、なかなか受入れがスムーズにいかないこともあり、退院が延びている患者さんもあり、ベッドコントロールが難しいこともあります。回復期リハ病床はほぼ満床状態です。ですが、整形外科の患者さんは3ヶ月と期間が短くなってきていますので、退院調節をしながら他の患者さんを受入れており、回転も早くなっています。

Q: どうしても在宅に帰れない患者さんはどうなりますか?

A: 在宅に向けて回復期病棟に来られますが、当院は関連施設もありますので、そちらを利用させていただいたりしています。関連施設でワンクッションをおいてから在宅に帰っていただくことが可能です。介護保険の適用でない患者さんでも、相談員などと連携をとりながら関連施設への受入れ調整をしています。また、ケアハウスや養護老人ホームなどもありますので、そちらをご紹介させていただいたりしています。

ただ、生活保護を受けておられる患者さんは、当グループでの受入れが難しい場合もあります。

Q: 他医療機関との連携でお困りな点はありますか?

A: 当院の回復期の患者さんで、他医療機関への受診もされた場合に、他医療機関の医師も経過を観察し、どうしても必要な抜かせない検査があると思いますが、上手く患者さんの情報交換ができていなかったため、患者さんが行ったり来たりになったケースがありました。現在は、他医療機関の地域医療連携室ともご相談をさせていただいて、当院でできることは当院でさせていただくように働きかけています。

Q: 業務の中で大事にされていることはありますか?

A: 患者さんご本人やご家族の意向を大事にするようにしています。当院は関連施設もありますし、福祉サービスもありますので、そういうものを上手く利用させていただけるようにご相談させていただいています。

Q: 貴院は総合リハとして理学、作業、言語療法も全てそろっていらっしゃるのですか?

A: はい。リハビリストアッフは老健施設の方にも配属になっておりますので合計48名です。うち理学療養士は25名です。その他、作業療法士15名、言語聴覚士8名、鍼灸師など充実したスタッフ構成になっています。患者さんは一度一般病棟に入られて、その後回復期リハ病棟に移されます。今後、同じ月での医療・介護保険の併用(外来のリハビリと通所のリハビリ)ができなくなりますので、それについてどうしていくかという課題はあります。退院後のフォローが大変になってくると思っていますので、入院中に効果をあげるため集中的にリハを行っています。

Q: 最後に、今後目指されていることなどをお聞かせいただけますか?

A: 回復期リハ病棟入院を含めて、リハビリテーション部は365日稼働体制になりました。できるだけ早めにリハビリを開始し、また当グループの施設などを利用していただきながら、早期に在宅復帰ができるようなお手伝いを今後もしていきたいと思っています。

お忙しいなか、取材にご協力いただきありがとうございました。

お知らせ

### 第22回 高知医療センター 救命救急センター救急症例検討会

5月28日(月) 午後5時半～  
場所:高知医療センター2F くろしおホール  
テーマ:眼科救急について  
お問い合わせは…  
救命救急センター

### 第4回 高知医療センター 外科グループ手術症例検討会

5月22日(火) 午後7時～(1時間45分程度)  
場所:高知医療センター2F くろしおホール  
お問い合わせは…  
高知医療センター消化器外科  
谷木利勝・西岡豊

### 編集後記

2007年4月1日、相談室待望のMSW3名が高知医療センターに採用されました。そのうち2名がまごころ窓口の相談室に配属され、昨年12月からのMSW不在が解消されました。

昨年度は、相談室主催で、医師を対象とした小児慢性特定疾患治療研究事業所および自立支援医療(更生医療)の制度についての説明会、院内職員の方を対とした公費助成制度説明会を行いました。日常的な相談業務以外にも、このような活動を通して相談室の存在価値が少しでも高まり、患者さんのお役に立てる存在として定着していければと考えております。

(相談室:山崎寿男)

